

「日本対アメリカ」異文化の狭間で

武田光史

I

あえて表題を「日本対アメリカ」としたけれども、我々日本人が日本とか日本人と呼ぶのと同じ感覚でのアメリカもアメリカ人も決して存在しないという事を、まず断っておかなければならない。イューナイティッド・ステイツ文字通り合州国（合衆国ではない）と言われるように国としての力よりも州独自の力の方がより強大であり、ヨーロッパ人（と言ってもアングロ・サクソンを中心にして、ドイツ系、フランス系、ユダヤ系、イタリア系、東欧系等々と非常に複雑であり、これを称してエスニック・グループという言葉まである）、アフリカ人、アジア人、中南米人と人種の多様さには宗教が結び付き自己主張を求めての利害も複雑にからんでいるといった具合であり、とにかく簡単には表現できず複雑怪奇としか言いようがない。なんだ、それぐらいの事は少しでもアメリカを知る者にとっては白明の事であると言われるであろうが、明治以降の移民の時代よりさらに良きにつけ悪きにつけ最も結び付きの強い現在においてさえ、我々日本人はアメリカ合州国について、我々一人一人に直接関係のある生きた知識としてはほとんど何も知っていないのではなからうか。真珠湾攻撃にはじまったアメリカとの惨劇はアメリカを一部の者がしかも一面的にしか知らなかったが故に挑んだ惨劇であり、また感覚的にしか知ろうとしなかったが故に敗れた惨劇ではなかったのか。しかも日本人のその本質は現在においても一向に改められてはいない。つまり現在においても経済のみを中心にした関係であり、またマスコミを通してのみの受身で死んだ知識にしかすぎないと言っても過言ではない。

神武景気とか岩戸景気とか呼ばれた急速な経済成長を経ての現在の繁栄の中にあって、アメリカをはじめ海外へと出かけて行く日本人の数は年毎に増大するばかりである。しかもそれは日本株式会社の利益をあげる出稼ぎのためであり、単なる物件遊山と買い物旅行のためであり、また若い連中の留学にしても単位を取るだけに四苦八苦かドロップ・アウトして帰ってくるという状態であり、諸外国での人間同志一人一人対等の交流という膚身の体験を通して、つまり異文化間でのかけ橋となるべき生きた知識を身に就けて帰ってくる者はいまだにごく少数なのではなからうか。

『文芸春秋』昭和六十年新年号でのロバート・C・クリストファー著『ジャパニーズ・マインド すれちがう善意、すれちがう敵意』についての対談で「これに見合うだけの日本人のアメリカ論があるだろうか」という木村尚三郎氏の問いに対して山崎正和氏が「日本には学者的ジャーナリストがあまりいないんですね。一般のジャーナリストは目の前のことだけ追っかけている。学者のほうはいやに深遠なことだけ論じている。」と答えている。つまり前者はすぐ忘れ去られる日々の出来事のみを追っかけ、後者は他人にはろくに理解もされない小難しい従って本人以外はほとんど誰も読まない論文と称する物だけを書いているという事でもあろう。そこで必要なのが両者とは逆の、つまり目の前の出来事であり

ながら一般の人にも理解できしかも心に残る内容の物が書ける、という事ではなかるうか。

以上の事を念頭におきながら、中学・高校・大学と英語を習いしかも英語教師でありながらロクに英語もしゃべれずましてやアメリカについての生きた知識など全くなく、また日本で生まれ日本で育った日本人でありながら自分の国についても自覚しては何も知ってはいなかったという反省の意味をも込めて、三年前の春と昨年の秋とわずか二回だけでしかも1週間余りの短いアメリカ体験ではあるがそのわずかばかりの体験を通して得た知識をもとに、「ジャパニーズ アンド アメリカン マインズ」といったほどの雑論をごく易しい内容で書き留めておきたい次第である。

II

日本は集団社会と言われるように、日本人は海外に出てまで団体を組んで新品の服を着てゾロゾロと、寝る時以外は四・六時中、貸切りバスでの観光時は言うに及ばずレストランで食事をする時まで一部のテーブルを占拠して我が物顔にといった具合である。しかもこの行動が個人社会である欧米においてはいかに奇異に見られているか、日本人はいまだ平然として気にかけてもいない。いやその行動が、歴史教科書での「侵略」表現問題と同じように、外部よりの批判を受けるという表面化した問題にまだなっていないが故に、気にかけようともせず気付いてもいないのである。相も変わらず団体を組んでカメラをぶらさげて小股の足を引こずってゾロゾロとのさばり歩き、いかにも金持ちと言わんばかりにこれ見よがしに公衆の面前で財布を開いて金を出し、時には下に落としたりでモタモタしながら土産物を買ひあさりといった具合である。とにかく日本人は何か事が起ってからでないとして反省などしようともせず、旅の恥はかき捨てとばかりに海外での気くばりなど有ったものではないのである。^(註1)

それとは異なって欧米の社会は個人社会と言われるように一人でか男女二人でかせいぜい家族同志度といった程度であり、十人も二十人も団体を組んでのプログラム通りの行動など有り得ないはず第一に不可能なのである。歩くのも大股でゆっくりと一歩一歩足を踏みつけるようにして(男はたいてい左手をズボンのポケットに突っ込んでいるのだが)、日本人のように忙しげにキョロキョロする事なく前方だけに顔を向け、いわばスキを見せないガンマン・スタイルなのである。また物を買うにも自己防衛的な意図もありおおびらに人前で財布を開くなどまず有りえず、必要な金額だけを(二重に折って人指しゆびと中ゆびではさんで)スマートにサッと差し出すのがアメリカン・スタイルなのである。

かくして歩き方と服装により一目で日本人だとわかってしまい、日本人は大金を持ち歩きしかもウロチョロ・モタモタとして警戒心が無いから絶好のカモとして眼をつけられ、眼をつけられるから「気をつける気をつける、危ない危ない」としきりに注意されるようになり、従って自分で計画を立てての自由な行動などさらさら出来なくなってしまうのである。

「赤信号みんなで渡れば怖くない」というギャグが一時流行したのは記憶に新しい所であるが、良い事も悪い事もみんな一緒にしないとする事が出来ないというこれはまさに日本人の集団行動心理をズバリ言い当てた言葉となっているのではなかるうか。逆に言えば「赤信号、車が走っていなくても一人だけでは渡れない」となるのであり、日本人はすでに幼ない時より植えつけられている画一的で集団主義的な学校教育により自分自身の判断による自分自身の責任における行動などなかなか出来ないのである。従って国内においてだけでなく海外に出てまでが団体がゾロゾロとなってしまうのである。それでも最近では若い連中が単身でドンドン一年から長くは四・五年以上とアメリカを中心にした大学とか大

学院でお客としてではなく対等な立場で学ぶために出掛けてはいる。だが十分な準備も予備知識も心構えも無くとにかく行ってみたいという憧れの気持だけが先に立ち、彼等の大多数はそれまでに受けてきた日本の教育からの脱皮がどれほど困難であるかを身をもって思い知らされての帰国となる。個人主義という壁とヨーロッパ系人種の威圧に直面してはとたんにギャフンと言われ自信を失ない自分だけの殻にこもっての孤立感にさいなまれ、持って帰ったものはひん曲った片苦しさと自己主張にたけた虚栄心だけ、身につけてきた英語もブrouクンな皿洗い英語か『怒りのぶどう』のオウギー英語、さらに五年以上もの滞在となると自己のアイデンティティをも失なってしまう日本語もろくに読めなくなっているという結末となる。

また昨今では義務教育かさらに高校教育までを外国で受けて（とは言っても日本での延長の日本人学校が中心なのだが）大学は日本に帰ってからという、つまり帰国子女の増加にともない日本の高校・大学も受け入れ体制が整いつつある。さてどのようなタイプの人間が育っていく事となるのであろうか、社会に出てよりの成果のほどが待たれる次第である。

日本の教育は、学校にあっては多人数で一斉に教師の一方通行による知識偏重の教育であり、家庭にあっては勉強しろと言うだけでいつまでも小供扱いの甘やかされての教育なのである。他方欧米での教育は学校においても家庭にあってはあくまで独立した個人となるための教育であり躰けであり、それを日本的に表現すると小学生の頃は大変「おませ」であり中学になると大変「大人びて」おり高校では何ら物おじする事なく誰とも対等に物を言い「何と生きな奴か」となるのであり、とにかく日本のように年令の上下の関係では決して相手を見ない事だけは明白なのである。日本では男であれ女であれすぐ相手の年令を知りたがり聞いたりするが、これは欧米では最も儀礼に反する事なのである。

欧米における個人主義とは誰もがよく知っている言葉ではあるが、我々小列島国民は海外に出ても集団で行動しその中に身を曝し対等に渡り合うという勇氣もなく、生きた知識としてはほとんど何もわかっていないのではなからうか。とにかくイロハだけを考えてみるに、その根底には一人の神の子としての全人間形成というキリスト教精神が脈打っており、特にアメリカでのその精神は新天地へヴン・オン・アースを求めて移住して来たピリグリム・ファーザーズ以来のアメリカン・ドリーム（桃色であろうと黒色であろうと黄色であろうと一応の建前上では皮膚の色には関係なく、神のもとでは平等な一人一人の人間としての才能と努力によりその夢はかなえられる）という強力な伝統へと引き継がれている訳である。^(註2)

言い換えるならば努力もせず才能もない人間はドロップ・アウトせざるを得ず社会の底辺に埋もれてしまわざるを得ない。そしてそこには一見して明白なる厳然とした上・中・下という社会的階層・階級（といってもピラミッド型ではなく富の大半は上に集中している）が生じる結果となり、日本国民の八割以上は中流でほとんど皆同じという社会構造とは全く異なったものとならざるを得ない。つまり個人対個人という厳しく激しい競争社会（日本でのそれは大学入学という時点で一応の終止符を打つ）であり、であるが故にその逃げ場として男と女だけのより強力な結合（もっとも最近では男と男、女と女の結合が増えているとの事であるが）、またその緩衝作用としてあの仰々しいまでのセスチャーと大きな目をさらに大きくしてニヤと笑いかけるという和らいだ柔らかな態度が必要となるのであり、しかもそういった態度をとりながらも自己を積極的にアピールする事は絶対に忘れてはいないのである。であるからこそ才能と努力でもって自己を売り込む事により高く評価されればされるほどそれには日本とは比較にならないほどの高収入がついてまわり生活はさらに豊かになり、物腰は自信にあふれて話す英語

もすばらしく頭脳はすこぶる明晰、世界をリードするオリジナルな発明はおよそ全てがアメリカから生まれるという必然の結果となる。元手をかけずにそのオリジナルなものを買入れて集団の力で応用し製品として逆にアメリカに売り込んでいるのが日本であり、しかも貿易収支は大幅な黒字、ところがアメリカは職のない多数の失業者をかかえているとなれば、黄禍論が頭をもたげ反感を持たれるのも当然といえば当然なのだが。

個人より先に集団・組織が優先する社会では、信頼関係が保たれある一定の目的へむかっただけの結束機能が有効に作用している場合には強力なパワーを発揮しそれは戦後日本の高度経済成長の原動力ともなった訳であるが、ところが一たび方向を見失ない停滞してしまふとなると慣れ合いとなり甘え体質を生じマァ～マァ～主義となり最近では和歌山県下津町に見られるような一出納室長による三十億円の公金横領が誰に気づかれる事もなく可能となる欧米社会では信じられない結果をもたらすのである。さらに集団・組織の相互でのバランスが崩れてくるとどうなるか、それは自由民主党がその典型ともいえる具体例を我々国民の前に示そうとしている。本来が自民党は法以前の道徳倫理をも含めて日本の社会構造を端的に集約した形で存在しているのであり、各派閥は時には馴れ合う事もあるが互に厳しく索制しあい激しく競争しながらの均衡を保っているが故に強大なエネルギーを生み出し、国民の共感と支援のもと結党以来三十年という長期に渡って政権の座についている訳でもあるが、ある一つの派閥のみが増大し強力となり均衡が崩れてくると……再び均衡を取り戻すのか分裂再編成へと進むのかその結論はまだ出ていない訳であるが、国民多数の注視的となっている次第である。

さらに日本人の集団主義的傾向のごく身近な例をあげるならば、昨年末の紅白歌合戦がその典型であると言えよう。あれは紅対白の歌合戦ならず満開のままサッと散る桜花に見立てての都はるみ引退の歌合戦と言ってよく、鈴木アナの気くばりよろしく声色を使つての名調子と降りしきる雪の中での森艶歌の絶唱に乗せられての奮闘気はいやが上にも盛り上がり、そしていよいよヒロインの登場により日本国民は共に泣き涙でもって最高潮となり、男のアナウンサーまでが感きわまったのであろう「みやこ」を「みそら」とトチって言ったりで日本国中が一体となり、紅組の圧倒的勝利でもって幕を閉じる。

たかがテレビ番組、なれどテレビ番組、もし仮りに日本の進路とか運命を決定するような重大な問題においてさえ日本人の行動原理は同じなのではなからうかと思つてみると、なにやらうすら寒い感覚が背筋を走るのを覚えたのは、ただ一人筆者だけであつたのだろうか。さてこのような場面での欧米人の態度はどうであろうか。それはまるで正反対と言ってもよく、ユーモアあふれる言葉と和気あいあいとした柔らかい態度でもって皆それぞれに笑みさえうかべて楽しみ、アメリカ人であればなお一層のこと陽気にふるまい最後は万雷の手拍子でもって幕を閉じる。さらにはっきりと言える事は、たとえ男であれ女であれいかなる場合においても、公衆の面前で理性を失ない感情のみに走り涙を流すなど欧米人にはまず有り得ないという事である。

また異文化の問題として、海外へ出た時のチップにはどうも頭を悩まされるとはよく聞く話であり確かに日本には無い習慣ではあるが、そんなに神経質になる必要もないのではなからうか。チップは心付けと小難しく訳されてはいるが要するにサービス料（いや恵み料）と考えれば良いのであり、ホテルの部屋掃除のサービスには五十セントとかの決まった額（基本給は最低であり、これがないと生活も出来ないという制度になっている）またレストランとかタクシーでは金額の一割から二割という予備知識（非常にサービスも良く快適だったと思えばハズんでやりその反対ならケチれば良い）だけ持っていれば後はケース・バイ・ケース（少ないのは悪いが多いのは良いだろうとばかりにどんな場合にも日本人

は必要以上にやりすぎるとかまた逆によく忘れて全々やらないとかで、むしろ軽蔑の対象になっているとも聞くが) でゆっくりとゆとりと自信を持って他の客の様子を気づかれぬように見習っての対応こそが必要なのではなからうか。チップの話のついでにレストランに入って給仕を呼ぶなどの場合にどうするか。男はウェイターだからそのまま呼んでも良さそうだが(バーなどでは日本ではボーイさんだからと言ってそのままボーイと呼んでは失礼、なぜ?)、女の給仕の場合はウエイトレスだからといって響きからしてどうも呼びにくいし(警官もポリースだからといってそうは呼ばないし、はて?)、そこでこちらを向いた時に日本式の手招きをするのだがニッコリとは笑っても全々やって来ようとしな(黒柳徹子の『トットちゃんのカルチャーショック』ではないけれどそれはバイ・バイという合図であり、掌を逆にしてでないオイデ・オイデにはならない。人によっては人指しゆびだけを立てての合図をするが、これは日本では「お前はドロボウか?」という意味に取られかねない。)

さてそれではどんなレストランで何を食べるか。大太平洋を越えアメリカ本土までやって来てフランス料理とか中国料理でもあるまいし、また生魚を食べる日本人とかかつては軽蔑さえされていたのが現在では日本料理が健康食としてブームにさえなっているのはお聞き及びであろう。だがやはりアメリカの代表的献立という大きなビフテキに新鮮な生野菜をたっぷり。ところが目の前に出されたのは大ききはワラウリで味もソッ気もなくまさに腹につめ込むだけといった感じであり、野菜の方は強い酸味のきいたドレッシングをして大ざっぱに切った堅いレタスと人参でまさにウサギの食べ物という形容がピッタリ。こんな物を毎日食べているとビヤ樽になるのは当然であり、またいつだったかアメリカ人に聞かれたのを覚えているが煮炊きした穀類を中心に食べている日本人にくらべ虫歯になる率が少ないのも当然なのである。あっさりして美味な日本食に慣れてしまった中年男がこんな物を食べさせられたのでは三日以上は耐えられず、とにかく旅というものは大なる好奇心と順応性にあふれている青春時代にやっておくべきだというのが一種の教訓にさえなっている訳である。

たわいもない事をくどくどと書き連ねたが、要するに文化的習慣の違いはピンからキリまでであるのであり、場合によっては命までも落し兼ねず、出来る限りの予備知識をたくわえて出かける必要性は言うまでもない。^(註3)たとえ初めての当惑するような出来事に遭遇しても決してオロオロする事なく(すぐにオドオド・ドギマギするか逆にカッと怒ってしまうのが日本人なのだが)、まず気を引き締めて落ちついての対処こそが肝要であろう。いろいろと初めての体験があるからこそ心はずんで楽しく、また強く心に残る良き思い出ともなるのである。寸分きざみでプログラム通りの団体旅行では未知との出会いも新しい経験も決して生まれず、思い出としてはほとんど何も残らないのである。

次いで言語の面からの異文化について考えてみると、アメリカ英語という言葉、これはしゃべる場合にはことさらイギリス英語とは異なっており、^(註4)また東部・南部・西部とかの方言(これは日本語でも同じだが、標準語といったものは存在しない)とか日本の学校英語では教わることなく部外者にも通じないアメリカ特有のスラング(俗語と訳されている)とかがあるのは知られているが、全々英語の話せない連中もかなり多く存在しているとは、行って初めて知らされた次第である。^(註5)さらに厳密に調べてみるにイタリア系、フランス系とか南米系とかにより訛りがあり、またこれはイングランドでも同じだが属している階級によりしゃべるニュアンスが異なるという具合であり、^(註6)言葉そのものが微妙な存在であるのに加えてアメリカの言葉は人種の複雑さ以上に複雑なのである。

という事は聞いても分らないからといって何もオドオドしたり物おじする必要はないのであり、正当

ないイギリス英語を身につけている我々日本人に通じないのはプロウクンな英語でない英語をしゃべっているからであり、もしも分らなければそのためにすでに中学で習う「パードン？」という単語があるのであり、それでも理解できなければ鉛筆と紙を出してやり書かせれば良いのである（もっともアメリカには綴りもろくに書けない連中も沢山いる訳ではあるが）。それでもダメなら個人主義者アメリカ人よろしく両手をひろげて大きなゼスチャーをしてからサッサと退散すれば良いのである。たかが日常的な決まり文句をしゃべる事ぐらい我々日常の日本語と同じように少しも難しい事ではなく、中学で習った英作文で十分に用は足せるのであり（もっともそれが身につけていればの話だが、また知らない単語は言われても分らず出来るだけ覚えておいた方が便利なのは当然）、むしろ度々言っているように日本人は集団——温室と形容できよう——の中で育ち生きているが故に一对一での対話となると勇気がなくすぐにオロオロ・ドギマギで引っ込み思案になってしまう、それが問題なのである。日本人は現在に至っては世界をリードするだけの発展を成し遂げている優秀な国民であり、その強い自覚のもとに自信をもって一たび外に出たならば正々堂々と一人で歩ける事こそが、これからの日本人に課せられた責務なのである。

なるほど「言葉が文化をつくる」とか「文化が言葉を生み出す」とかは言いえて妙である。個人主義の国においては言葉は明晰で論理的、しかもかなり感情を高ぶらせて話してもリズムカルに響き相手にそれほどの不快感を与えない。また個人と個人との対立を和らげるために先にふれた「パードン？」があり「イクスキューズ ミィ」「アイ' ム ソーリィ」の連発があり「サンキュー」があるのである。ところが日本語では「ア〜ウン」だけか「スイマセン」で全てが通じ、間の言葉と言われるようにゆっくり間を置き感情を押さえて話さなければならず、また一歩さがっての寡黙こそが美德とされているのである。それがアメリカ語をしゃべるように早口でペラペラやられると（多弁軽薄となり）聞くに耐えず不快感を相手に与えさらには集団の和を乱す結果ともなり、そのような態度は酒の席以外では暗黙のうちに戒められているのである。

さらに述べれば、正月三日朝十時よりのNHKテレビでの中曽根首相の記者会見をごらんになった方もあると思うが、端的に言ってまさにあの首相の姿こそがアメリカ人とはまるで正反対の日本人の典型的な態度と言えるであろう。気を付けの姿勢で真正面を向き、何らのゼスチャーをまじえる事なく表情も全く同じで堅苦しく、しゃべる言葉も何らの抑揚もなく担々と……。傍らの通訳はと言えば、これまたしゃべる英語は有能ながら日本人の典型であり、個々の単語の発音は正確ではっきりとしているのだが、英語特有のイントネーションとカリズムはほとんど完全に欠落しており、まるで英語になっていないのである。「郷に入っては郷に従え」というようにアメリカにあってはアメリカの態度と英語があるはずなのだが、なんとなく情けない思いで観ていたのは、ただ一人筆者だけであっただろうか。

III

とかく日本人は国外に出た時には傍観者の立場で「日本よりも良い」とか「日本よりひどい所だ」とよし悪しの価値判断をくだしがちであるが、これは国際化の時代にあっては厳に慎むべきであり、違いを違いとして受け入れお互に知り合い認め合う事こそが国際交流の原点となっているのは言うまでもない。と同時に現在では直接日本で学び日本を知ろうと海外からやって来る人々も増加の一途をたどっており受け入れ体制も整いつつあるが、それはあくまで集団を越えた一人一人の個人が前提であり一人一

(註7)

人の交流を通しての日本であり、開かれた文化国家としての脱皮をも急速に迫られつつある。

経済の面では資源のない製品輸出国としてかつての村落共同体は戦後においては企業共同体となり高度経済成長を達成し、今や貿易黒字もアメリカを中心として年々増大、企業進出による海外投資額もついにアメリカを抜いてトップの座を占めるに至り、現状のままでは諸外国よりの圧力は一段と強まりもはや摩擦は避けられず、すでにバランスのとれた調和の時代へと政策転換を迫られつつある。日本だけという一国の利益のみを求めてがむしゃらに突っ走る事のできた時代は終わろうとしているのである。

教育の分野においても、ますます狭まりつつある地球のますます開かれつつあるこの国際社会での一役をになう事のできる日本人を育てるための戦後最大の教育改革が試みられ模索されつつある。国内にあっては日本古来の伝統としての和を重んじる人間であり国外に出ては一人の独立した個人としての言動ができる人間でなければならず、すでに島国日本の垣根は内に外にと取り外されつつあるのである。これからの十数年、長い歴史と伝統による個有の姿を守りつつ外には開かれた日本として変貌すべく、世界の中の日本は試練の時を迎えているのである。

【 註 釈 】

(1) 「百聞は一見に如かず」とばかりに、くどいようだがその具体例の一端を、写真でもって示しておきたい。これは空港での一コマであるが、団体でゾロゾロと並んでいるのは日本人だけであり、一事が万事において同様であると言っても過言ではない。



(2) その具体例はいくらでもあげられようが、最近の例では、民主党の大統領候補にもアフリカ系が立つ事ができ（もっとも本人自らが「もしアフリカ系でなかったならば必ず……」と人種差別への批難を訴えてはいたが）また副大統領には女性になる事もできる（もっともイタリア系であるが故にマフィアとの関係を云々されたりもしたが）という具合であり、とにかく個人の能力（建前上では）次第での栄光と悲惨さが表裏一体となっているのが、アメリカなのである。

(3) 端的な例ではあるが、その国の文化（習慣・制度）を知らなかったが故に生じたのが「生麦事件」でありさらに薩英戦争へと発展した歴史上の事実を取り上げるならば、生きた知識としての予備知識がいかに必要であるかを納得していただけるのではなからうか。さらに自ら進んで求めた予備知識を身をもって具体的に体験した時の感動ほどすばらしいものは無いのである。また逆に冒頭で述べた内容についての卑近な例ではあるが、語学が専攻とはいえ博士課程を出て大学で教えている先生でさえ「ろくに役にも立たない専門以外には如何に勉強もしておらず知らないか」の具体例として、サンフランシスコでのホテルのバーのカウンターに腰をかけながら「こういう仕事はメキシコ系が多い」と伝えていた所、いきなり本人に向かって「アー ユー ア メキシカン？」と声をかけ一瞬の殺気にびっくり仰天してスゴスゴと逃げ去るという出来事もあったりで、強く印象に残っているが故に記しておきたい。

(4) すでに十数年前のロンドンでは「お前のはアメリカンではないな」と言って喜ばれ、また今回はアメリカ人に非難めいて二度三度と「日本人の英語はブリティッシュだ」と言われたが、確かに現在はアメリカンが主体であるとはいえ伝統的にはブリティッシュであり、さらにそれ以上に日本人のしゃべる英語は日本語と日本人の特性からしてどうしてもブリティッシュに近くならざるを得ないのである。

「日本対アメリカ」異文化の狭間で

- (5) 日系人の苦難の歴史を描いたNHKの大河ドラマ『山河燃ゆ』は記憶に新しい所であるが、日系人はじめ大半の移住者はこの一世紀ほどの期間に移住して行った人達であり、二世、三世といえども日本人街とか中国人街、イタリア人街という枠内だけで暮していれば何も英語など話す必要はないのである。さらに現在では特にメキシコよりの不法入国者が跡を絶たず、しかも低賃金で働く彼等をアメリカ自体が必要としている、これが偉大なるアメリカの栄光とは裏腹の現実の姿でもあるのだ。
- (6) 属している階級と話す言葉は切っても切れない関係にあるという事は、映画『マイ・フェア・レディ』を見られた方には納得いただけると思う。
- (7) 一回目は駆け足のバック旅行で良いとしても、二回目からはたとえ女性といえども、映画『旅情』のキャサリン・ヘプバーンのようにとまでは決して言わないが、二人か数人で十分な計画を立ててゆっくり楽しむ旅でありたい。もっとも国内ではすでにそういう傾向が出て来てはいるが………そこで「何をええかっこうばかり言っとるが、お前自身はどうなんだ？」と言われそうなので、三日四日と同じ所にとどまっの個人旅行での体験を、ぶしつけながら写真でもって示しておきたい。上はニューヨークに個人で数日間も滞在していたが故に知り合えたアメリカン。下は一年後に偶然にか必然かわが「うさぎ小屋」（と嘲笑されてはいるが、高度経済成長による人口の都市集中化により特に「住」に対する美意識を日本人は捨てざるを得なくなっているが故にいたし方なかろう）までやって来た当人。

